2017年9月24日中野教会「聖書の学び」

聖書箇所：オバデヤ書1:12-18

　　　　　　　　**「オバデヤ書：エドムの滅亡とイスラエルの回復」**

　本日の聖書箇所はオバデヤ書からです。ホセア書に始まる12小預言書の4つ目です。オバデヤという名前は、奴隷、僕の意味のアーバードとイスラエルの主なる神ヤーヴェの組み合わさった言葉であり、「主の僕」という意味です。旧約聖書にオバデヤという名前の人物は10人以上おりますが、オバデヤ書の著者と推測されるオバデヤは、このオバデヤ書1:1で「オバデヤの幻」と言われているオバデヤ以外はおりません。直前の文書はアモス書でありイスラエルを含め近傍の民族それぞれに滅亡が預言されています。エドムもその一つで滅亡預言がされています。1:11-12をお読みします。「11 主はこう仰せられる。 「エドムの犯した三つのそむきの罪、 四つのそむきの罪のために、 わたしはその刑罰を取り消さない。 彼が剣で自分の兄弟を追い、 肉親の情をそこない、 怒り続けて いつまでも激しい怒りを保っていたからだ。12 わたしはテマンに火を送ろう。 火はボツラの宮殿を焼き尽くす」とあります。テマンはエドムの都市で知恵者が多くいた、とされるところです。おそらく宗教都市でしょう。ボツラはエドムの都があった都市です。おそらく商業都市でしょう。そしてアモス書9:12には「これは彼らが、エドムの残りの者と、 わたしの名がつけられた すべての国々を手に入れるためだ。 －－これをなされる主の御告げ－－」とあり、「エドムの残りの者」について語っているため、エドムについての裁きの預言であるオバデヤ書はアモス書の続き、と理解され、アモス書のすぐ後に置かれた、と考えられます。そのエドムは「剣で自分の兄弟を追い、 肉親の情をそこない、 怒り続けて いつまでも激しい怒りを保っていたから」神はエドムを滅ぼす、と言っています。エドムはイスラエルの兄弟なのです。エドムというのはユダ王国の南の地域でエサウの子孫の地という事になっています。南の端はアラビアのロレンスで有名なアカバ湾です。創世記25章にエサウとヤコブが双子で生まれたいきさつが記されています。イサクの子どもはエサウとヤコブですが、このエサウがエドム人の祖先で、ヤコブがイスラエルの祖先です。この二人は母リべカのお腹の中で、生まれてくる前から「ぶつかり合う」状態であったと言われています。また彼らの子孫の作る2つの国は弟分のイスラエルが強くなって、兄貴分のエドムがイスラエルに仕えるようになる、と予言じみた言葉があります。悲劇が生まれます。エソウが飢え疲れて居た時、ヤコブの煮物（にもの）をもらう代わりに長子の特権をヤコブにあげてしまったのです。アブラハム、イサクの直系は兄のエサウではなく弟のヤコブになってしまったのです。そしてエサウはエドム人となりました。アモス書で「自分の兄弟」と言われているのはそのためです。

イスラエルとエドムの関係はズーっと戦争の歴史です。モーセは荒野を彷徨ってカナンの地に近づくとエドムの地を通ることを避け回り道してヨルダン川東につきました。サウル王、ダビデ王は何度もエドムと戦争をしました。ソロモン王の時代には完全にイスラエルの支配下に入っていました。しかし、イスラエル王国が南北に分裂したのち、イスラエル王ヨラムとユダの王ヨシャパテがエドムと共にモアブと戦っています。この時はイスラエルとエドムは同盟関係にあったようです。ユダ王国とエドムの関係は支配、反乱、独立が繰り返される事態であったろうと思われます。ユダ王国はついにバビロニアに滅ぼされるのですが、そのときエドムはバビロニアに手を貸したようです。これがユダとエドムの対立関係を決定的にしました。エドム人は旧ユダ王国にかなり移住してきたようです。その後、バビロニアはエドムも滅ぼします。そして後に、アラブ系ナバテヤ人がエドムに入って来てボツラを占領しました。これが世界遺産で有名なぺトラ遺跡と見られます。これの前、アレキサンダーの死後はこの地はエジプトの影響下からシリアの支配になって行きます。このころからエドム人はイドマヤ人と呼ばれるようになります。そして、ユダがシリアから独立したマッカビーのハスモン王朝の時代にはイドマヤはユダヤ教に改宗させられています。そのイドマヤ人であったのがヘロデ大王です。旧イスラエルの土地を支配下に納め、主の神殿再建に力を尽くしました。彼はヘレニズム化を進めたとはいえ、一応ユダヤ教徒であったのです。そしてイドマヤ人は、AD66年のユダヤ人の対ローマ反乱の時、ユダヤ人と行動を共にし、ローマに滅ぼされます。ユダヤ人はご承知の通り宗教共同体として存続するのですが、エドム人は民族的独立性は失われ、消滅しました。地理的には今はヨルダン王国の南部ということになります。宗教的には今はイスラム教スンニ派ですが政治的な内情は複雑なようです。

このようにイスラエルとエドムは曰く因縁の関係とでも言いましょうか、複雑な関係です。しかし、創世記以来古代においては基本的に対立関係です。良好な関係にあったのはほとんどありません。このオバデヤ書はそのエドムの滅亡を預言しています。エドム王国の滅亡は歴史的にはユダヤ滅亡ののち約30年後です。ユダ王国が滅びエドム王国が滅ぶ前にオバデヤは預言したとするとオバデヤ書の内容は理解しやすくなります。BC586年とBC553年の間、ということになります。

オバデヤ書は一章だけの文書です。先ほどお読みしました12節より前の1節から12節はエドム滅びの預言です。3-4節をお読みします。「あなたの心の高慢は自分自身を欺いた。 あなたは岩の裂け目に住み、高い所を住まいとし、 「だれが私を地に引きずり降ろせようか」と 心のうちに言っている。/あなたが鷲のように高く上っても、 星の間に巣を作っても、 わたしはそこから引き降ろす。 －－主の御告げ－－ 」とあります。エドムの地は岩山の多い地形であり、高いところで、岩と岩の間の石造りの家に人々は住んでいました。いわば自然の要塞であり、高慢にも自分たちは安全だと信じて敵を馬鹿にしていました。それは自己欺瞞です。そこを主なる神は「引きづり降ろす」と言われるのです。その理由は11節に述べられています。「他国人がエルサレムの財宝を奪い去り、 外国人がその門に押し入り、 エルサレムをくじ引きにして取った日、 あなたもまた彼らのうちのひとりのように、 知らぬ顔で立っていた」と言われています。ユダの滅びの時に、眺めているだけで、兄弟を手助けすることもしなかった、というのです。エドム人もエルサレムを占領し略奪した他国人の一人のように知らぬ顔で立っていた、というのです。ユダ王国がバビロニアに滅ぼされる時のエドムのことだ、とすると「さもありなん」というところです。そして先程お読みした箇所にはいります。

12節では「あなたの兄弟の日、その災難の日を、 あなたはただ、ながめているな。 ユダの子らの滅びの日に、 彼らのことで喜ぶな。 その苦難の日に大口を開くな」とあります。「大口を開く」は3節で言われている「心の高慢」とおなじことです。「高慢」は自らの力を誇ることです。聖書では旧新約聖書を通じで高慢を強く戒めて居ます。ダニエル書5:20ではバビロニアの王ネブカドネザルについて「彼の心が高ぶり、彼の霊が強くなり、高慢にふるまったので、彼はその王座から退けられ、栄光を奪われました」と言っており「高慢」な自分の力を過信した王は、神様が王座から引きずりおろす、と言っています。第一コリント書13:4では「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません」と言っており高慢は愛なき結果である、と言っています。キリスト教の歴史に置いて高慢は最も重い罪と考えられてきました。しかし、今の世の中は“自信をもって生きろ”、“自分の力を信じろ”、“勝利者になれ”と言われ、高慢になることがむしろ勧められています。キリスト教は真逆なことを言います。“あなたが力を得たのはもっぱら神様の計画によるのであってあなたの実力の結果などではない”ということです。私たちは、主に依り頼み、高慢から遠ざかる信仰を願い求めなければなりません。また集団としてはどうでしょう。日本国のことを振り返ってみましょう。明治以降の日本国の歩みは実に高慢な歩みでした、日清、日露の両戦争、更に、第一次世界大戦、台湾、朝鮮の植民地化、満州国の設立、そしてアジア・太平洋戦争と高慢さを絵に描いた餅のように歩んできた歴史です、欧米諸国に追いつけ追い越せの結果、欧米諸国の植民地主義の仲間入りして、より残虐な支配を行ったのです。アジア・太平洋戦争での敗北はこの高慢さを打ち砕き、我々に悔い改めの機会を与えました。これを悔い改めず、先の戦争はアジアの解放のためであった、という自分勝手な正当化を行うのは神様の導きを愚弄した高慢の限りを尽くしている、と言って良い、と思います。私たちの神様は高慢の罪を認め、悔い改める心に、祝福を与えてくださる神様です。私たちは悔い改めを恥としません。私は、個人としては大変謙遜な人間が国の指導者のような地位に立つとその集団を極めて高慢な道を歩むように導く、ということはどういうことなのか、について考えてきましたが、解答は得られていません。個人の倫理が社会倫理となる過程の中で悪魔のささやきが心に入って来るのです。オバデヤ書は集団としてのエドムが自分たちの住んでいるところは安全な場所にある、ということから高慢になり主なる神によりたのむことをせず、裁きをまねく結果になった、と言っています。

ここで一寸、ヘブル語聖書が詩のように構成されている、という点を見てみましょう。12節から14節までに否定形表現が繰り返し出てきます。12節の「眺めているな」と「喜ぶな」と「開くな」。13節の「入るな」と「眺めているな」と「伸ばすな」。14節の「立ちふさがるな」と「引き渡すな」です。ヘブル語は動詞が文章の最初にくるのが原則でその否定詞「アル」はその前に置かれます。ヘブル語聖書ではこの否定形の動詞すべてが行の最初にきており、否定詞「アル」が8つ並ぶ形で記されています。当時、聖書は聞くものでしたから、韻を踏んで読まれたものと思われます。また12節の「兄弟の日」、「災難の日」、「滅びの日」、「苦難の日」のように「日」という言葉が繰り返し使われます。これは「ヨーム」という言葉ですが、8回繰り返し使用されています。これがすべて「わざわいの日」とか「「苦難の日」のようにユダ民族が経験する大いなる苦難の時を指しています。これも読む時、音楽的リズム感を与えたことでしょう。エドムは兄弟民族ユダの国家存亡の危機の時に、「逃れる者を断つために道をふさぎ」、「生き残った者を敵に引き渡した」というのです。またユダ族の財宝にも手を伸ばしたようです。明らかに、ただユダ族の滅ぶのを「眺めていた」だけではないのです。敗残者に更なる仕打ちをしているのです。これらは終末の日の前に起こることです。

15節ではエドムに対する裁きの言葉から転換しています。15節では「主の日」即ち終末の日はエドム以外の国々にも臨みます。どの国も自分がした残虐が自分に振り返ってきます。エドムがシオンの山で「神の怒りの杯」を飲まなければならなくなるように、すべての国々は「神の怒りの杯」を飲んだりすすったりせざるを得ず、「今までになかった者のようになる」即ち、神の怒りにより滅亡する、というのです。17節で「しかし、シオンの山には、 のがれた者がいるようになり、 そこは聖地となる。 ヤコブの家はその領地を所有する」と告げられます。ヤコブの家即ちイスラエルの「逃れた者」はシオンの聖地を所有するようになり、主なる神の僕として聖なる地の支配者に仕える者とされる、という訳です。これがイスラエルの希望です。少数の「逃れた者」が希望の星となるのです。18節では「ヤコブの家は火となり、 ヨセフの家は炎となり、 エサウの家は刈り株となる。火と炎はわらに燃えつき、これを焼き尽くし、 エサウの家には生き残る者がいなくなる」と言われています。ヤコブの家はユダ民族です。ヨセフの家はヨセフの子孫のマナセが住んだ地で北王国イスラエルの地です。エサウの家はエドム人です。従って、ユダ民族は火となり、北王国の民は炎となり、エドムの地を焼き、エドム人の国は焼け跡の刈り株となる、というのです。そしてエドムの地には「生き残る者」もいない、というのです。主の日即ち終末の日にはイスラエルの「逃れた者」が主なる神の僕となり、神の国の統治に仕える者となり、逆にエドムは「生き残る者」さえいなくなるほど完全に滅亡させられる、というのです。

私たちは、これらの終末の時のことを現実の歴史に適用することには慎重にならなければなりません。キリスト教の一部には現在のイスラエル国家は主の日におけるイスラエルの国の萌芽である、という考え方があるからです。この考えからアメリカ政府がやっているようにイスラエルを政治的に応援するのです。キリスト者にとってイスラエルとは主イエスに従う者クリスチャンのことを指し、旧約のイスラエルがそのまま終末のイスラエルであるということは、ありえない、ことです。このような新約の見方を別とし、旧約だけで考えたにしても、現在のイスラエル国家がダビデ王朝国家の復活であり、終末における神の支配の萌芽なのだというユダヤ教の一派の考え方は「主なる神」の御意志であるとは到底考えられません。パレスチナ人にあれほど残虐なことを行い、核兵器をさえ隠し持っている、とされる軍事国家イスラエルが「神の国」の予型であるはずはありません。アメリカにおけるキリスト教原理主義の潮流は政治的にもこのようなイスラエルの超右翼の考え方を支持しています。しかし、ユダヤ教は、すべて単純にそのような考え方になっているのではなく、“現在のイスラエル国家は人の力、金の力で建国されたのであって、神ご自身が復活させるイスラエルとは全然別物だ”として、信仰共同体として苦難の中を生き延びてきたイスラエルを強調し、世界中に散逸しても信仰共同体としてのユダヤ社会を維持し、真の救い主即ち神の支配が確立される終末の日の希望を信ずる、というのです。彼らから見た場合、現在のイスラエル国家はサタンの支配する国という事になります。またユダヤ人の中に主イエスを信じるキリスト者の群れも小さいながらあります。現在、その勢力が拡大している、とも言われています。このように、ユダヤ教は極めて多様な考え方の集合です。この点が、かつての日本やドイツにおいて皆が一つの考え方に統一され、異なる思想が圧殺されたようなファッショ的世界ではありません。それは現在のイスラエルがひどいことをやっていても思想の多様さは守られる、という健全さがあります。イスラエルは大変な苦難を背負った民族ですが、預言者が掲げた希望に賭ける信仰を未だ正統的に持ち続けている人々も居る、ということです。彼等は、17節の「逃れた者」を現在のイスラエル国家とは無関係で、終末の日、信仰共同体に与えられる主なる神の僕を指しているとしています。主なる神が選ばれるのであって、自分たちが「逃れた者」である、と主張するなどもっての外、ということです。それこそ「高慢」ということになります。

19-20節では、終末の日には罪ある民が今まで迫害してきた民たちに支配されることになる、というある種の報復が述べられます。ネゲブの地はエドムの西に位置しますが、ネゲブの人々がエドムの地を占領し、低地の人々、即ち、ユダの西、ペリシテの東の豊かな地の人々は逆に地中海岸のペリシテ人の地を占領する、と言っています。また彼らはエフライム即ちユダヤ人の地の北や、サマリヤ即ち北王国の南部の地をも占領すると言われています。またベニヤミン即ち、ユダの地のすぐ北の民はギルアデ即ちヨルダン川北西の地を占領する、と言われています。おそらく、オバデヤ書記述の前に占領され迫害を受けた国が今度は支配者の地を占領する、と言っています。20節のツァレファテはフェニキア、今のレバノンにある、サレバテ、セファラデは小アジア今のトルコの西の方にあるサルデスを指しているのではないか、と推測されています。即ち、捕囚によってつれ去られたイスラエルの民はその地に在って支配する者とされる、ということです。最後に21節で「救う者たちは、 エサウの山をさばくために、シオンの山に上り、 王権は主のものとなる」と言われています。「救う者たち」とは主の日にイスラエルを救う神の使者です。複数形です。まだ、イザヤ書、エレミヤ書の言うような「救い主」のところまで純化はされていませんが、それを指し示している言葉である、とは言えます。イザヤ書59:20に「シオンには贖い主として来る。 ヤコブの中の そむきの罪を悔い改める者のところに来る 」とあります。この「救う者」という表現は新約聖書でも一か所出てきます。ローマ書11:26です。「こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。こう書かれているとおりです。 「救う者がシオンから出て、 ヤコブから不敬虔を取り払う」」とあります。異邦人が救われ最後にはイスラエルのみなも救われる、ということを言っています。そのために、「救う者がシオンから出て、 ヤコブから不敬虔を取り払う」というイザヤ書の先程の句が引用されています。ローマ書での「救う者」はイザヤ書での「贖い主」のギリシャ語訳と同じ「ゴーメール」という言葉を使っていますので、この「贖い主」がオバデヤ書1:21の「救い主」と繋がっている、ことが解ります。ここで重要なことは、これらは、主の日の出来事ですから、“報復は主がなされることである”ということを言っていることです。それぞれの民が自らの力でそのようなことを起こすのではないのです。主なる神に希望を置くという事は、自ら報復をせず、主なる神の裁きに委ねる、ということを意味しています。これは個人的な恨みについても同様です。委ねきることができれば恨みの心は消え、平安が得られます。

　私たちはこの短い預言の書によって、自らの力を頼りにする高慢な者を主は許さず、必ず引きずりおろされ滅びに到らせられること、また主の日に迫害した者どもに主は報復しますがそれは主ご自身がなされることであり、我々は恨みを置く人々への裁きを、全く主に委ねるべきことを学ぶことができました。このことは私たち個人としてのことでもあり民族としての日本国民についても同じことです。私たちは、日本の歴史を振り返るにつけ、これに反する歩みを続けてきたこと、また今も変わった形で続けていることを知らねばなりません。私たちキリスト者はこれらを悔い改め、平和の君の説く愛の戒めに従うことを恥としません。罪を認めたら方向転換すればよいのです。それこそ神の国の証人（あかしびと）です。祈ります。

（ご在天の父なる神様、今日のひと時を感謝致します。「高慢」は主に委ねることのできない我々の罪から、という事をお示しいただきました。どうぞ、悔い改めの勇気をお与えください。また日本国民が「悔い改めを恥とせず」との信仰に立ち、すぐる戦争にて大きな罪を犯したことを大胆に悔い改めることができますよう導きを与えてください。主のみ名によって祈ります。）